



医学部だより

第12号

2006.8.1

医学部での教育改革は続く!

医学部長 曾根 三郎



医学部内の建物は、長い年月を経て老朽化が著しく、現在、医学科研究棟の第四期改修計画の内、第二期工事が進行している。栄養学科は2年前に終了し、今年度は蔵本地区の中心となる事務管理棟を含めた改修であり、建物のトンネル部分が閉鎖され南北に玄関口が設定される。玄関ホールにはアクセス容易な学務課窓口と、学生、教職員が集い語り合える場、憩いの場としてのカフェテリア（生協）がオープンス形式で設置される予定である。また、2つの基礎講堂も来年度には改修が行われる予定。保健学科研究棟も第5病棟跡地の改修計画が病院再開発計画と併せて進んでおり、今後、教育、診療、研究の3つの活動が実践できる施設環境へと蔵本地区は大きく変貌していくものと期待している。

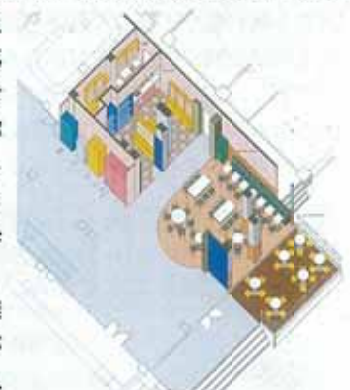
今回、テーマとして「保護者からみた医学部」が取り上げられている。自分流に解釈すると、医学部へ入学して来られる学生の保護者はどのような期待をされているのか、入学された子弟を通して実際の医学部の状況をどう見ているのか？そして、最も関心が高いのはおそらく、医学部を卒業した後、どのような進路を選んでいるのか？と思われる。保護者の視点から意見や提案を多く頂き医学部を見直してみるのも、今後の改革に役立つことにもなり良い機会だと思われる。

保護者にとって最も関心の高いものの一つとして、国家試験合格率が上げられる。管理栄養士、看護師の合格率は高い水準にあるが、今年の医師国家試験合格率は国立大学42大学中40位と極めて悪い結果を生じてしまった。その要因としていろいろな理由が挙げられている。例えば、偶然、悪い結果となった。今年の卒業生は学力不足、国家試験内容が実習重視型問題へと大きく変わった。教育改革（チュートリアル、クリクラ）のせいだ。卒業試験と国家試験とが内容的にかけ離れていた。臨床実習が5年で終了しその後の自学自習には限界などが指摘されている。現実と直面する問題として、現在の卒業試験の位置づけとあり方が問われており、国家試験の動向との関係から検討を開始

している所である。

過去5年間にわたり、社会や国民のニーズに応える良き臨床医の育成をめざした医学教育改革が全国的に行われてきた。自ら学ぶ小グループ制のチュートリアルが導入され、講義をぐつと減らして臨床実習に重きを置き、見学型から参加型へと変革して来た。その結果、自立的なマインドが醸成されてきたとも思われるが、その達成レベルに個人差が大きく生じているのも事実であり、いろいろな要因を検討し、さらなる改善にむけて取り組む必要がある。

文科省主導による医学教育の標準化を目指した取り組みとして、臨床実習に入るための資格試験 Computer-based test (CBT) が導入され、平成17年度より全国的に実施されている。また、平成16年度より導入された前期臨床研修の義務化は卒前教育にも大きなインパクトを与えている。すなわち、医師国家試験は初期研修へと円滑に入っていくための知識や技能のチェックを兼ねる資格試験として位置づけられようとしている。これらに対応するためにどのように対応していくかは難しい問題でもある。しかし、改革の方向が医師養成の専門学校へと逆戻りしてはならない。大学院大学の道を選んだ徳島大学は学生時代からいかに研究マインドを身に付けさせるかの教育システムが求められている。今、教務委員会にて平成19年度からの第二次教育改革の計画案が検討されている。教育改革に正解はなく、試行錯誤を繰り返しながらも国民や社会が求める医師、臨床研究者、基礎医学研究者の養成に向けた卒前、卒後教育システムの構築を継続して取り組んでいくことが正解に近づいて行く道だと思われる。



カフェテリアイメージ画

医学部後援会長ご挨拶

医学部後援会長 田岡 博明



この度、廣瀬政雄前会長の後任として医学部後援会長を務めさせて頂くことになりました。どうぞよろしくお願いいた

します。

まず本後援会について簡単に御紹介させて頂きます。

正会員は医学部および大学院医学研究科・医科学教育部、栄

養学研究科・栄養生命科学教育部、ならびに保健科学教育部に在籍している学生さんの保護者により構成されており、入学された際に納入していただく会費および入会金をもとに運営されています。

本会の主な目的は医学部および大学院研究科における教育と研究ならびに設備拡充を後援することにあります。例年行っております事業としては、入学式、卒業式当日に行われる諸行事の補助、学生・学事の厚生補助、教育設備の充実に対する補助、教職員の教育研究に関する会議出席等の補助、毎年開催される医学部学生の西日本体育大会への参加の補助などがあります。また別予算で保護者から納入していただいている助成金により徳島大学白菊会、ならびに青藍会館の運営助成にも関与しております。国からの予算のみでは十分に運営されにくい部分をより円滑に行うために重要な役割を担っているものと考えられます。

近年医学医療を取り巻く環境が大きく変貌している事は申す迄ありませんが、特に医療に携わる個人の資質を問われる場

面が多くなっている様に思います。相手の要望や気持ちを理解する能力、また自分の考え方や行動を相手に正確に伝える能力、現場での状況に即した思考力、困難な状況を切り拓く問題解決能力等々、一人の医療従事者に求められる事は膨大であると思います。

しかし乍ら、一方では大変厳しい批判や理不尽な扱いを受けることも多く、合理的に考えれば割りに合わない仕事と感じてしまう可能性も否定できません。

そうした荒海とも言える医療の現場に船出してゆくためには、しっかりとした自負とプライドが感性のなかに培われている事が大切だと思います。

私たち後援会は大学の教職員の皆様と協力して学生さんたちが学ぶためのより良い環境づくりに努力して参りたいと考えています。

今後ともよろしくご指導、ご協力頂きます様お願い申し上げます。

特集

保護者からみた徳島大学医学部

医学科学生保護者

娘の徳島での生活も早4年目となりました。娘に一人暮らしをさせている母親として、感じたことを少し述べさせていただきます。

徳島大学は下宿生が多く、一人暮らしでも気軽に生活できる様で、自転車を下駄代わりにして行動出来るのはとても微笑ましいことです。本四架橋のお蔭で本州、特に関西圏からのアクセスも便利になり、徳島を非常に身近に感じられる様になりました。

一人暮らしという点で親として気掛りなのが「食」に関してです。現在政府が「健康日本21」と旗揚げして「食と運動」に力を注いでいますが、確かに若者のアンバランスな食生活は大きな問題です。常三島キャンパスの生協ではおうどんがとても美味しかったし、他にも自分の選択でバランスのとれた食事が出来る様になっているのに感心したのですが、蔵本キャンパスでは話を聞く限り首を傾げたくります。栄養学科もあることですし、業者と粘り強く交渉し、どんどん改善を迫り、学生のみならず職員の方々にも安心して食生活を送って頂けるようには出来ないものではないでしょうか。

開かれた特色ある医学部を目指してー

徳島大学医学部から日本全国、そして世界に向けて積極的に最新・最良の医療に関する情報発信を！
高度な専門的医療と豊かな人間性を具備した医学生の養成を！

医学科学生保護者



人生80年、高齢社会を迎え、医療に関する期待と関心がますます高まっていますが、一方では、新聞記事やテレビ報道等によると連日のように医療ミスや医師の倫理に関する事柄が後を絶ちません。このことを考えますと、医療に関わっている先生方、特に大学の先生方の責務の

重大さと御苦労に頭が下がる思いが致します。

さて、二男が六年間お世話になっております徳島大学ですが、平成15年には『21世紀COEプログラム』に二つの拠点選ばれ、『特色ある大学教育支援プログラム』に、そして、『現代

その他、医学部系の学生は将来、人と深く係り合い、人の心の機微に触れることも多いでしょうから、専門へ入るまでに政治、経済、法律のイロハは勿論のこと、人生経験の豊かな人の話を聴く機会を多く設けて頂けたら有難いと思います。社会に出てから生涯教育という形で聴く講演の中に、こんな話をもっと若い頃に聞いておきたかったと思うことが沢山あるようです。また、よくアメリカの学会に参加されていた方が「学会後のレセプションの時には社会の一般的な関心事について聞かれ、普段から自分の考えをしっかりと持っていないと一人前に見てもらえないよ」と話しておられました。

注文が多く贅沢な保護者で申し訳ございませんが、多くの心豊かな方々が母校となる徳島大学から羽ばたいていかれますよう祈っております。



的教育ニーズ取り組み支援プログラム』にも三件採択される等、世界のトップレベルの大学としての評価を受け、更に、そのレベルを向上させつつあると聞いております。保護者の一人としても、大変喜ばしいことであり、誇りに思うところです。

また、徳島大学長の青野敏博先生が『徳島大学の目指すもの』として

1. 特色ある教育システムの構築
 2. 独創的で世界トップレベルの研究拠点の構築
 3. 密接な産学官の連携と幅広い地域貢献
- の三本の柱を基本構想として掲げておりますが、このことも大変素晴らしいことだと思います。

高度な専門的医療と豊かな人間性を具備した医学生の養成と、『開かれた特色ある医学部を目指して一徳島大学から日本全国、そして、世界に向けて積極的に最新・最良の医療に関する情報

発信を!』このことを保護者として、今後も大いに期待しております。

栄養学科学学生保護者

子どもの成長は早いもので、ついこの前、入学したように思いますが、もう3回生になりました。級友や、先生方には大変お世話になり、ありがとうございます。子どもは、自宅からの通学なので、時間的余裕もあるのか、ボランティア活動、そして、趣味の音楽やアルバイトなど、青春を謳歌?と言うか、ばたばたと、多忙な日々を送っているように思えます。いずれにしても、明るく成長していった欲しいものです。

さて、蔵本キャンパスへは、何度か私も行っていましたが、病院と言うイメージが強く、大学と言う感じが余りしません。キャンパスと言えば、広場があり、緑があり、学生が木陰で、おしゃべりをしている。何か、ゆっくりと時間が流れている。そんな事を思うわけですが、空きスペースは車で溢れているのが現状です。キャンパスの拡大は、予算面もあり難しいかも知れませんが、将来の課題として捉えておいて、現実的には、緑を増やす(ケヤキなどを植え、木陰をつくる)事や、桜や季節の花を植える事も大切なのではないのでしょうか。学生、先生、患者さんも、屋外に出て、四季の移ろいを肌で感じながら、談笑できるような、安らぎの場所があればいいなと思います。

思いを寄せて

富士山は日本の誇る美しい山の一つです。私たちのイメージに残るのは、あのなだらかな稜線です。すそ野を形成している原生林を美しいという人は、ほとんどいないことでしょう。しかし、富士山がああ偉容を誇れるのは広大なすそ野があってこそです。

保健学科では、基本理念として「高度化、専門化する医療を支え、保健・医療・福祉において多様化するニーズに対応できる有能なコ・メディカル・スタッフを養成します。人間尊重の倫理に立脚した高い使命感や、専門的知識・技能と同時に、チームの一員としての協調性を有し、国際的な視野をもって医療および福祉の発展を支えることのできる人材を養成します。」とあります。今春大学院もスタートし、ますます高度医療の中核としての機能を充実させていってほしいところです。

また、少子高齢社会の到来は、医療・保健・福祉に対応したニーズが飛躍的に多くなってきています。徳島県では全国に先

徳島県は、「糖尿病死亡率日本1」という現状です。食べ物、運動、肥満などがいわれていますが、徳島大学医学部の3学科による、トータル医療・チーム医療で、罹病率改善に力を発揮していただけたら、非常にありがたいと思います。



又、本県では過疎化が進み、医師不在の地域も増えてきています。特に、海部郡では、小児科医、産婦人科医も深刻な状況です。救急医療体制も不安です。子育て中のご家庭はもとより、地域で生活している方々にとって、安心の確保は不可欠です。県立海部病院も拠点病院として頑張っていますが、医師の確保が大変難しくなっています。心配はたえません。地域医療の確保、特に医師の配置等に、ご尽力いただけますようお願いいたします。

保健学科学学生保護者

駆けて高齢化が進んでいると言われていています。地域に根ざした医療の中心としても指導的な立場にある本学として、県民の負託にもこたえてほしいと思います。

このように、健康に関する中核センターとして、高度な医療技術者として、芸術(ナイチンゲールの言葉)として保健学科が存在していくことを願っています。そして優れた医療技術者を輩出してほしいと思います。

富士山が、あの高さを維持できるのは、土台がしっかりしているからです。基礎が一番大切なのです。基礎基本の徹底こそ最重要事です。イギリスの教育哲学者、ホワイト・ヘッドは「教育内容は厳選せよ、しかし教えるべきことは、徹底して教えよ」と言っています。また、優れた医療技術者として育つことはもとより、信頼される社会人として大きく育ってほしいと願うのは私ひとりではないと思います。

保健学科学学生保護者

「行ってきます。」今朝もいつもより早くに出かけていきました。

病院実習が始まり、精神的にも肉体的にも疲れていると思うのですが、なぜかイキイキしているようにも見えます。「しんどい?」と聞くと、「うん。でも楽しい。」という答えが…。私には分かりませんが、学内の授業では学べないことが、病院という現場ではたくさんあるようです。

一年間遠回りをしたけれど、庭のインターロッキングはできなくなったけれど、徳島大学医学部保健学科検査技術科学専攻で勉強できるようになって本当によかったと思います。病気のことを勉強してくれるというのは、家族にとってちょっぴり頼りになれる…かもしれません。また、学内の実習で血液検査、尿検査やエコーなど様々な検査ができるのもよいことではない

かと思っています。

まだまだ続く病院実習、卒業論文、そして国家試験。バタバタと忙しい日が続くと思いますが、頑張りたいと思います。保健学科の先生方、よろしくお願いします。

あー、いつの日だったか、授業中に大きな蜂が飛び込んできたと聞きました。今の教室は五階だそうですが、根性のある蚊がよってくるかもしれませんし、好奇心旺盛な蜂が今度は集団でやってくるかもしれません。教室に網戸を取り付けるのは無理なのではないでしょうか。

今、我が家の庭はヒメイワダレソウが一面に広がって、小さな白い花をいっぱい咲かせています。インターロッキングになくて良かった…(^_^)

保健科学教育部の設置について

保健科学教育部長 長 篠 博文

徳島大学医学部保健学科は、本年3月初めての卒業生132名を社会に送り出しましたが、更に近年の医療の高度化、社会や疾病構造の変化に対応し、保健医療活動において指導的役割を果たして先端医療に貢献できる高度専門職者と教育研究者を育成するため、本年4月に徳島大学大学院保健科学教育部（修士課程）が設置されました。

保健科学教育部は保健学専攻1専攻から成り、その中に3つの領域、看護学領域、医用情報科学領域、医用検査学領域を設けています。本年4月に第1期生として、定員14名を上回る17名の入学者を迎えました。そのうち8名が3月に本学医学部保健学科の卒業生、あとの9名が社会人です。

本教育部が設置された蔵本地区にはヘルスバイオサイエンス研究部、医科学・栄養生命科学・口腔科学・薬科学の大学院各教育部があり、生命科学研究の一大拠点となっています。大学院保健科学教育部は、この利点を生かして共通の講義の提供・共同研究の実施を図るとともに、独自の特色を伸ばすことを目指します。現在更に大学院博士課程の設置を目指して計画中です。

大学院における保健科学教育を支援するための特別教育研究経費も配分され、看護学領域のアドバンストヘルスアセスメントシステム、医用情報科学領域および医用検査学領域の生体機



保健科学教育部上掲式

能解析支援システムと細胞機能形態解析システムを導入すべく、準備を進めています。これらは、蔵本地区での共同利用、共同研究にも活用します。

助産学専攻科の設置について

助産学専攻科長 長 篠 博文

本年4月に徳島大学助産学専攻科が設置され、国立大学として初めて4年制大学卒業生に対する助産学教育を開始し、定員通り10名が入学しました。専任教員3名は本学医学部保健学科から移動し、保健学科と一体として運営されています。

助産学教育は、長年、看護学教育終了後1年間専修学校や短大専攻科で行われてきましたが、近年、看護教育の大学4年制化に伴い、看護師・保健師の教育と共に選択制による助産師教育が4年間の教育の中で行われるようになり、本学保健学科でも昨年度第1期生19名の教育を行いました。しかし、4年間で3つの国家試験受験資格が得られるというメリットがある一方、カリキュラム編成が過密になり、実習において分娩介助回数10例程度という条件を満たすため、学習負担が過重となる一方、

看護学・保健学教育にも影響を与えています。

そこで、この問題を解決するため、専攻科設置に至りました。本専攻科は、助産実践に必須の判断能力と実践能力を身につけた、母子保健の発展に向けて豊かな未来の創造に貢献できる人材の育成を目指しています。カリキュラムは助産基礎領域、助産実践領域、育成支援領域で構成され、34単位以上の履修を要件とし、助産学実習は19単位（必須15単位、選択4単位）開設しています。

なお本学の助産学教育プログラムは、平成20年度までは保健学科看護学専攻での選択によるコースでの教育と、専攻科での教育が並行して行われます。



新任教職員あいさつ



人間にとって他の生き物と同様、「からだ」は、とても大事なものです。しかし、「こころ」がないと、人間とはいえません。自分で感じる喜怒哀楽、他の人とコミュニケーションを取りながらの感覚、その双方がうまくバランスを取れていないと、人間は生活さえ

保健学科地域・精神看護学講座 教授 上野修一

できません。医療者は、「こころ」についての基本を知り、こころの病気についての見立てや情報を知り、また、「こころ」を病んだ人に対してどう接するかを知っていなければいけません。様々な機会を通して皆さんと、「こころ」について話したいと思います。気軽に声をかけてくださればと存じます。よろしくお願いします。



この4月から保健学科の教員として赴任いたしました。自由な風を味わいたいと思い、先の職場を辞職して早くも4年が経過していました。辞職にあたり、定年退職まで働けば、経済的にも時間的にもゆとりはできるが体力が衰える、体力のある若いうちは経済的に問題があり、人生の中で、三拍子がそろうのはわずかだから、このときを楽しんでくださいと、某看護部長さんから言われた言葉が印象的でした。親戚や周囲のものから見るとこの行

保健学科母性・小児看護学講座 教授 岸田佐智

動は非常に奇異に思われたかもしれません。両親には心配をかけたかなと思いつつ、一番理解があったように思います。今、改めて感謝の念でいっぱいです。しかし、自由気ままな人生もずっとは続けられない、やはり看護の教職につこうと考え決心をするにも随分と時間がかかりました。今、海外で知り合った日本の大学教員の「年を重ねてからの職場の変更は適応するのが難しいよ」といわれた言葉を実感しています。これからよろしくお願いします。



徳島大学助産学専攻科の教授に就任いたしました葉久真理です。本年4月、国立大学として初めて4年制大学卒業後の助産師教育を開始いたしました。本学での助産師教育50年の歴史を土台に、女性のライフサイクルの変化の過程に関わる助産実践に必須の判断

助産学専攻科 教授 葉久真理

能力と実践能力、および徳島大学の教育理念のもとで学生の多様な個性を尊重し、人間性豊かな専門的能力を身につけ、母子保健の発展に向けて豊かな未来の創造に貢献できる人材の育成に努力してまいります。ご指導、ご支援をよろしくお願いいたします。



本年4月1日付けで、事務部長に就任いたしました明渡志郎と申します。平成16年4月からスタートしました国立大学法人化が3年目を迎えて、ますます、国立大学を取り巻く環境が厳しくなっております。特に、行政改革の一つである国家公務員の5%以上を純減させる人員削減が当面の課題となっております。

医学・歯学・薬学部等事務部長 明渡志郎

す。また、本学部においては、昨年度から医学系総合実験研究棟の改修工事が実施されており、今年度は、事務室等の改修を含めたⅡ期改修計画が実施予定です。事務部では、この改修計画に合わせ、学生サービスの充実、教育研究の支援業務がスムーズに行える事務組織の見直し等に向け、事務部職員全員が力を合わせ頑張りますので、皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。



▲ 保健学科学生主体のクリーン委員の活動により、自転車の違法駐輪が激減！

総合実習室による改修後の階段付近



▲ 附属図書館東側に整備された駐輪場が完成

附属図書館南側に整備された憩いスペース



数字で見る医学部

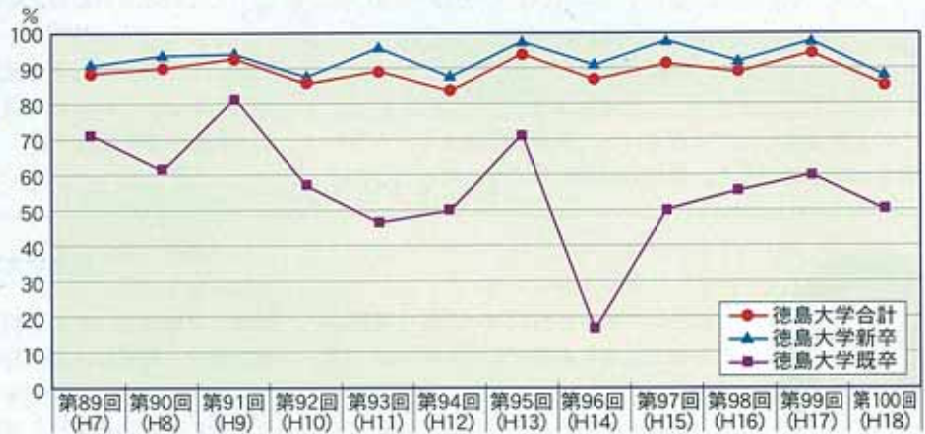
◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

平成 18 年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数調・入学者数調

	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	海外	現役	一浪	その他
医 学 科	95	736	470	96	95	71	24	32	63	0	38	34	23
栄 養 学 科	50	200	117	54	53	17	36	13	40	0	43	9	1
保 健 学 科	看 護	70	257	161	79	72	7	34	38	0	54	14	4
	放 射	37	185	120	41	39	29	7	32	0	31	4	4
	検 査	17	86	66	23	21	3	9	12	0	18	2	1

◆ 国家試験

医師国家試験
合格率の推移



管理栄養士
国家試験
合格率の推移



保健学科
各種国家試験
合格状況について



文部科学省科学研究費採択状況

医学部長補佐（研究担当） 寺尾 純二



今年も大学の総合的な研究力の指標となる文部科学省科学研究費（科研費）の採択状況を報告する。本学医学部・附属病院の合計は毎年増加で推移しているが、本年度も同様の結果であった（表参照）。昨年に続いて若手研究（B）獲得が順調に伸びて

いる。ただし徳島大学全体で見ると、配分総額で全国19位（平成12年）から21位（平成17年）へ、教員1名当たりでは同じく22位から23位へと、大きな変化はみられない（朝日新聞社・大学ランキングより）。大学間競争の時代において、医学部への期待とともになお一層の努力が求められている。

科学研究費補助金採択状況（医学部・附属病院の合計）

（平成18年6月13日現在）

研究種目名	平成15年度		平成16年度		平成17年度		平成18年度	
	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）	件数	金額（千円）
特定領域研究（2）	7	78,900	9	83,500	11	60,800	9	67,200
基盤研究A（2）	0	0	0	0	1	18,590	1	14,430
基盤研究B（2）	20	96,500	21	102,350	18	96,100	20	123,500
基盤研究C（2）	59	92,600	68	100,800	59	89,500	56	98,300
萌芽研究	8	10,700	10	16,800	10	17,900	10	16,400
若手研究（A）	1	8,700	1	7,400	1	8,710	1	13,390
若手研究（B）	32	49,300	38	58,900	55	89,900	66	109,600
特別研究員奨励費	4	2,922	3	3,000	0	0	0	0
合計	131	339,622	150	372,600	155	381,500	163	442,820



【医学科基礎学実験研究棟（A棟）】

正面右側が改修済

左側が今回改修部分

医学部行事予定（7月～11月）

- 7月23日(日) 西日本医科体育大会（8月14日(月)まで）
- 8月3日(木) 徳島大学オープンキャンパス（学部説明会）
午前：栄養学科，午後：保健学科
- ” 医学部保健学科看護学専攻体験入学 午前
- 8月4日(金) 徳島大学オープンキャンパス（学部説明会）
午前：医学科
- 10月2日(月) 後期授業開始
- 10月17日(火) 解剖体慰霊祭
- 11月2日(木) 徳島大学開学記念日
- 11月3日(金) 大学祭（5日(日)まで）



新 入 生 合 宿 研 修

医 学 科

新 入 生 合 宿 研 修

本年度の新入生合宿研修は、医学科と栄養学科が4月7日（金）～8日（土）に徳島県立牟岐少年自然の家で行なわれた。好天に恵まれ、7日は到着後に約10名のグループに分かれて、グループ内での親睦を図るため海岸散策、夜はグループ対抗のゲーム、8日は船で約30分の距離にある出羽島めぐりを行なった。少し体調を崩した学生も出たが、けが人もなく無事合宿研修を終了した。同じ高校からの友達がいる新入生、誰一人知った人のいない新入生など様々であろう。この合宿研修が、学生相互の親睦を図ること、また何年後かに振り返った時に、生涯を通じての友人に出会う一つの機会になっていることを祈っています。

（学生委員長：西村 匡可）



栄 養 学 科

少 し 変 っ て き た 栄 養 学 科 の 今 年 の 新 入 生 研 修

毎年、1泊で新入生の合宿研修を行っているが、栄養学科においては最近大きな変化が見られている。4年前から男子学生が増えてきたことだ。50人中男性が1人しかいない学年も何回かあったくらいなので、現4年生の6人でも最近ではかなり多い人数であった。やっとバスケットボールのチームができるようになった。それが、昨年（今の2年生）は9人と、野球のチームができる人数までになった。今年、できればサッカーができればいいと期待していたのだが、期待を上回る17人の男子学生の入学があった。サッカーどころか、ラグビーのチームができる人数になった。今までも男性を入試で冷遇してはいなかったが、推薦入試の面接を行っても、女性の方がはきはきしており、なかなか面接で合格レベルに達する男子学生がいなかった。今年、推薦、後期と面接に



（提供：太田学生委員）

立ち会ったが、はっきり意見を言える男子学生が増えてきた。最近では、どんどん研究もがんばり博士後期へ進学する女子学生も増えてきている。そして栄養学の分野で、中心になって活躍する女性が増えてきた。私にとっては、栄養学科の男子学生には悪いが、女子学生の方がしっかりしているように見えていた。

男性中心のところばかり過ごしてきた私が、栄養学科に来て最初に気がついたことは、女性は男性の多いところにいる時と、女性ばかりにいるときは全然違うと言うことだ。あまり男性を意識していない感じである。実際、今までの栄養学科の女子学生は、男子学生を全然意識していなかったといってもいいぐら

いである。栄養学科の男性は女性に押されて小さな存在であった。そのくらい男性の存在価値が少ない（少し言い過ぎかもしれませんが）。その分、男子学生の中のまとまりは非常によかった。特に阿波踊りでは、本当にまとまり、一致団結して運営している。

今年の研修会は今までと違い、男性がかなり多くなった。それ

までの栄養学科の男性はおとなしい学生が多いせいとか、新入生合宿でのグループ対抗などでは女性が中心になっていて、男性は実におとなしかった。女性も新入早々から我が物顔で取り仕切っていた。今年、少し変わっていた。男性の発言が多くなり、結構男性が中心になってきた。これで実質的な男女共学の学科になった。男子が多いとそれなりの問題点も増えてくるかもしれないし、その心配

も少しずつ起こってきている。今までは授業も男子は休むとすぐにわかったが、これが多くなると薄まってくる。

栄養学科設立当時は男子学生の方が多く、卒業後には、それぞれの人材が我が国の栄養学の分野で中心となって非常に活躍している。最近その勢いが、かげりつつあった。しかし今年の学生などをみていると、このような日がまたやって来ることが夢では無いような気がしている。いずれにしても、この研修中も、数年前とは違った活気があった。男性、女性に限らず全員が立派に成長して欲しいと期待している。

（学生委員：中屋 豊）

保健学科

「保健学科の新入生合宿研修」

保健学科の新入生合宿研修は4/8-9の日程で行われました。今年度からこの研修は「大学入門講座」として1単位の授業科目の一部となったため、保健学科では2月から教職員と上級生で準備委員会を数回開催しました。新入生同士のコミュニケーションが取りやすくするよう、グループ単位のゲーム（漂流脱出ゲームやフルーツバスケットなど）を取り入れたり、新しい大学生活に早く馴染めるように新入生からの質問を受けて上級生がアドバイスをする「Q & A」などの工夫をしました。研修後のアンケートによると、最も印象に残った活動はフルーツバスケットを挙げた新入生が多く、来年度もこのようなゲームを活用しつつ、新入生の円滑な大学生活への導入を計りたいと考えています。

（学生委員：香川 典子）



学遊抄 夢を追って

予防環境栄養学分野 太田 房雄

いつかアメリカへと夢見て徳島大学へ入学した。入学間もなく外国語研究会（クラブ活動）に入り、2年目からはほぼ毎日朝5時に起きて英字新聞や聖書などを読んだ。専門3年生になった昭和40年、今の蔵本祭の前身である医学展の前夜だった。「たばこ」についての展示責任者となり種々の英文論文を夏から秋にかけて読んだ。折しもこの真っ直中にサンケイカラーシップ（第3回）の筆記試験があった。幸い英字新聞などのお陰で、2,696名が受験、258名の合格者の中に入った。残念ながら、書類審査（最終試験）で最終合格者30名に入らず、改めて在学中の成績評価の重要性を知らされた。

事は卒業の年だった。当時丁度短い白衣をまとい脳の手術をする映画の主演「脳神経外科医“ベン・ケーシー”」にあこがれ、是非沖縄の那覇にある米軍病院でインターを受けたくて、早速受験票を完成して郵送する手はずを整えた。

当時学生運動が激しく、クラス会で帝国米軍病院へこの受験票を出すとクラスから除名にすると決議された。悩んだ末に当

時の足立春雄教授（狸おやじ：医学部だより2005年9号参照）に相談のため、木造官舎（現運動場の南詰め）を1時間ほど訪問した。彼曰く、アメリカへ行くなら、ボイコットされてもバイトであろうと何でも援助をするからと言われ、心強く感じてお礼を述べ玄関先で靴を履きかけた。その時「それでも同級生とは仲良くせよ」とぼつ〜んと言われ、この一言で受験票の郵送を諦めた。当時受験者が定員に満たず、受験者全員合格となった。今から思えば初めての人生の分かれ目だった。卒業後の自主研修中に郷里の某精神病院でアルバイトをした。

卒後大学院に入る直前、岡山大学へ転出した恩師の新見嘉兵衛教授（解剖学）から院生にという誘いを頂いた。脳神経に興味があったが、なぜか「解剖学」に躊躇し、また阪大微生物学研究所の竹田美文（元日本細菌学会理事長）氏から院生へのお誘いも受けたし、両方を1・2度尋ねた後お断りし結局本医学部細菌学講座橋本忠世講師のお誘いで？（元米国ロイヤル大学教授）院生となった。徳島大学への愛着？

ある事情にてその後日本へは帰らないと決心し、英国へ私費留学した。2年目にサンドー製薬会社（オーストリアのウィーン）から部長職（移民して）に明日からでもと強い誘いがあった。悩んだあげく父が脳梗塞の療養中であつたこともあり帰国した。第2の大きな分かれ目だった。その後次々と人生の別れ目と思える時が何度かあり、現在の職についてから15年以上になる。今でも人々を楽しく明るくする食用植物の探索とその作用機序など、中枢神経に関する思いが消えない。

どうしてあの時に異なる人生を、悪い選択ばかりをしたのかと人は言う。250年以上続いた一家の長男として、母の希望を半分だけ叶えて臨床医になり損ねたが、祖父母と両親及び恩師の死水は取った。後悔はない。次は自分だ。果たせぬ夢を今後も追ってと考えている昨今である。



グランドキャニオンで腰掛け夢を思いえがく筆者

■■■ 医学英語学習の本格導入！ ■■■

外国人教師(カルビ先生)の講義が、4月から始まりました！

Hello, everyone!



My name is Bukasa Kalubi. Please, call me Kalubi. I am from the Democratic Republic of Congo. I am married and father of two boys. I hold a MD degree from Kinshasa University (1981) where I worked as a Senior Lecturer in the Department of Otolaryngology until 1986. In that year, I

earned the Japanese Government Monbusho scholarship to undertake research in Osaka University Medical School. Upon researching in allergic mechanisms, especially the neurogenic inflammation, I was awarded a Ph.D. in Medical Sciences in 1992. Due to political instability in my country, I chose to remain in this peaceful country where I was successively involved in post-doctoral research, English medical research proofreading and editing as well as teaching English Medical Terminology at Kansai Medical University during the last four years. In my free time, I have an extensive extra-professional activity. Indeed, I am a member of the board of a Japanese volunteer group, NGO/SESCO, which devotes itself in supporting educational projects in developing countries and in increasing children-parents communication in Japan. I also enjoy studying various topics like psychology, healthcare management, education, etc.), talking to my friends and family, watching soccer

games. That is to tell you that I am very excited and looking forward to the up-coming World Cup.

It's a great pleasure to be part of the faculty of Tokushima University where I have been given the mission to improve the level of both the undergraduate and graduate students in English Medical Terminology. I am very excited about the challenge and I will do my best to respond to that expectation. My strategy will be "No student left behind". Being part of the Medical Education Support Department, I also have a wide range interest in medical education, particularly in all aspects pertaining to the sharpening of judgment in future healthcare professionals. I am looking forward to learning a lot during my stay in Tokushima University, especially how you approach healthcare education problems and see what can be applied back in my country. As much as I can, I would also like to foster the cooperation between Tokushima University and my alma mater, Kinshasa University. I love discussion and am an out-going person. If you need my help, do not hesitate to contact me and if you meet me on campus, do not be shy. Say Hi! or Jambo! (Hi, in Swahili).

Bukasa Kalubi, MD, Ph.D.
Assistant Professor

和 訳

こんにちは皆さん

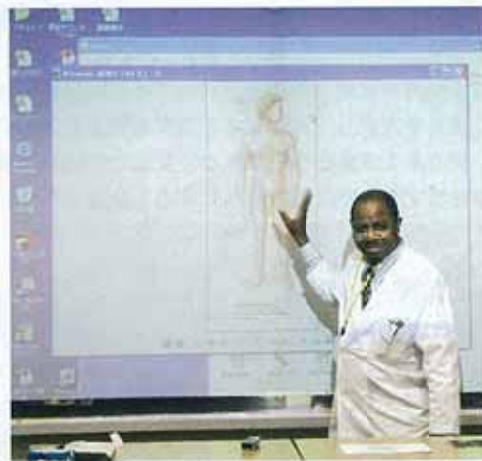
私はカルビ・ブカサです。カルビと呼んでください。

私は、コンゴ民主共和国の出身です。私は結婚しており、2人の息子の父親です。1981年に母国キンシャサ大学で医学のMDを取り、耳鼻科で1986年まで senior lecturer として働きました。そして日本政府文部省の奨学金を得て大阪大学医学部でアレルギーのメカニズム（特に神経原性炎症による機序）の研究を行い1992年に医学博士 PhD を得ました。

当時の母国の内政不安のため、私は平和な日本に留まることを選び学位取得後も研究を継続しながら、英語の医学論文の査読と編集を行い、最近4年間は関西医大で英語医学用語 (English Medical Terminology) を担当してきました。余暇には、専門外の活動を行っています。それは世界に学校を送る NGO (SESCO) のメンバーとして発展途上国の教育支援企画と日本での親子のコミュニケーションを増やす活動を行っています。また、心理学や健康管理、教育などの勉強や、家族や友人と語り合い、サッカー試合観戦することを楽しんでます。ワールドカップが近づき興奮して待ち望んでいます。

徳島大学の教員として、学部と大学院生の英語能力を改善する使命を与えられたことは私の喜びです。私はこの挑戦に張り切っており、期待に応えるように最善を尽くします。私のモットーは「No student left behind (おちこぼれを作らない)」です。私は医学部教育支援センターに属しながら、医学教育（特に特

来の医療専門職としての判断を研ぎ澄ます観点から)に幅広く関心を持っています。私の徳島大学在籍中に、医療教育の課題の取り組み方や多くを学び、母国に適応できるもの



を見つけないと思っています。私の母校であるキンシャサ大学と徳島大学の連携を最大限育みたいと思います。

私は話好きで、明るい性格です。もし私の助けが必要ななら、躊躇なく私に連絡ください。私にキャンパスで出会ったときは、恥ずかしながら「Hi!」とか「Jambo!」(スハヒリ語でHi!)と声をかけてください。

Bukasa Kalubi, MD, Ph.D.
Assistant Professor

テキサス大学医学部生を迎えて

医学部長補佐 村澤普恵

6月14日、15日の2日間、徳島大学と学術交流の提携を結んでいるテキサス大学医学部から、2年生のダイナ・ブイさん、3年生のエリザベス・トゥロングさんが、アニール・クルカーニ教授の引率で本学医学部を訪れた。医学部で留学生以外に交流校の学生を迎えて、本学の学生と交流を図ることは初めてのことである。

4年生のチュートリアルや医学部の講義への出席、大学病院や蔵本キャンパスの施設の視察等に加えて、医学部3年生と4年生合わせて8人の学生と日米間の大学入試や講義の違いについて話し合うディスカッションに出席した。ダイナさんが、インターネットを利用した学習法・e-ラーニングが普及しているテキサス大学の講義について「学生のペースに合わせて受講でき便利」と紹介し、また、「米国では、学期中は勉強に追われる毎日で勉強以外のことはほとんどできない」と話すと、本学医学部の学生からは「米国医学生の勉強量の多さに大変驚き、危機感を持った」等との感想が聞かれた。

この他、3年生や4年生と一緒に生協の学生食堂で昼食をとるなど、日本の普段の大学生活の一部にも触れ



てもらい、また6年生の案内で、鳴門の渦潮、阿波踊り、藍染体験、茶道等、徳島や日本の文化等も経験してもらうことができた。

ダイナさんとエリザベスさんは、「徳島大学の医学部生がテキサス大に来ることがあれば、心から恩返しをしたい」との言葉を残し帰国。2日間という短い期間ではあったが、このたびの学生間の交流が、両校の友好をますます深め、将来のさらなる共同研究、そして、国境を超えた医療・医学の発展に結びつくことを祈りたい。

● テキサスの医学生 医学科4年 砂川 暁 ●

ディスカッションで印象的だったのは、e-learningの話だ。講義を録画したビデオが配布され、家にいながらにして講義を受けることができるという教育システムだ。ビデオを見るよりも、教室まで体を運ぶ方が気分的には楽だと私は思ってしまふ。さぼっているうちにビデオが山積みになってため息をつくなんてことになりそう。もっとも100% e-learningに依存しているのではなくライブ講義もあるので、勉強のペースをつかむために講義に出席する学生も多いとは聞いたが、

一番印象的だったのはLizもDanaも自己主張がとてはつきりしていて、話し方によどみがないことだった。あいまいな言い方を避けて誤解を減らし、自分の考えを相手に正確に伝えられるように話す。訴訟大国アメリカで医師として働く上でLizとDanaの態度はとても大事な要素であろうが、その態度は私たちも見習うべき点があるだろう。

● 異文化交流 医学科6年 柴田貴世・中村佳世 ●

私たち医学科6年生が観光案内をする事となりました。初日に鳴門の渦潮を観光船に乗って眺め、藍染め体験をし、二日目には日本文化の代表である茶道を体験した後、阿波踊りにて締めくくりました。アニール教授は何度も来日されており、日本文化にも精通されておられました。エリザベスとダイナは、初めての来日で、日本文化に大いなる興味を持つと同時に、日本とアメリカの医学生の違いについて話が弾みました。アメリカでは、学校で試験が全て点数化されており、それによって一生が決まるので、入学当初はあまりの厳しい現実に毎日泣いていたそうです。そんな状況にあっても、おしゃべりや遊ぶ事を忘れずにパワフルに生活している姿に感銘を受けました。日本とアメリカの教育システムのどちらが良いかは分かりませんが、二日間の観光を通して、教育の違いについても思いを馳せることが出来、また、友情の輪も広がり、とても有意義な時間を過ごす事が出来ました。

モンゴル健康科学大学学長をお迎えして

医学部長補佐 村澤普恵

医学部では、前週のテキサス大学医学生に続き、6月22日と23日の2日間、医学部との学術交流提携校である、モンゴル健康科学大学 (HSUM) のルハグワスレン学長、ナラントゥヤ副学長 (国際関係)、アルタイサイハーン医学部長をお迎えした。

訪問初日は、曾根医学部長と、今後の共同研究や交流などについて話し合いがなされ、その後、医学部教授会に出席、学長によるモンゴル健康科学大学の紹介があった。また、歯学部と薬学部を訪問し、坂東歯学部長、高石薬学副学部長と、共同研究の可能性について前向きな話し合いがなされた。

訪問2日目は、青野学長を表敬訪問、続いて、ガレリア新館 (日亜会館) も視察。その後は、訪問の締めくくりとして、観潮船による鳴門の渦潮観光であったが、海のないモンゴルの皆さんにとって船での渦潮観光は大変好評であった。

7月末には、医学部から教授と6名の学生がモンゴル健康科学大学を訪問する予定である。私も同行をさせていただくことになっているが、このような相互交流は、両大学の、そして、徳島とモンゴルの大きな架け橋になることと信じている。



写真で見る医学部



6月28日(水)に文部科学省医学教育課 山腰課長補佐、飯泉徳島県知事らをお迎えし保健科学教育部・助産学専攻科設置記念式典・祝賀会を実施しました。



5月22日(月)にホテル東急インにおいて、第39回白菊会総会が開催されました。白菊会会員159名、来賓2名の皆様が出席され、会員相互の親睦をはかりました。



準硬式野球部

5月29日に愛媛で行われた中国四国医科学生野球大会で、我が医学部準硬式野球部は28年ぶりに優勝することができました。初戦は昨年王者・岡山大に7回コールド勝ちし、昨年決勝のサヨナラ負けの雪辱を果たし、その勢いで危なげなく優勝を収めました。

(主将 矢野 勇大)

サッカー部



5月28日に大阪で行われた関西地区医学生サッカー大会で3位になりました。最近勝てない期間が続いておりうれしかったです。このままの勢いを保って中国・四国大会、そして西医体も勝ち進んで行きたいと思いますので期待してください。
(副キャプテン 齋藤 広幸)



編集後記

今回の特集では、保護者の皆様からさまざまなお便りをいただきました。学生諸君が充実した生活を送り、高度な知識と技術、高い使命感・倫理観、協調性を備えた医療人に育つようにしなければと思っています。さらに医学英語学習の本格的な導入や米国やモンゴルとの交流(合宿研修)により国際的な人材が育つことを期待しています。

今年度の医師国家試験の合格率が非常に厳しい結果となりました。医学科では来年度以降のカリキュラム改訂に取り組んでいます。知識と技術の修得に加え、問題解決能力と探究心を育成できるカリキュラムが来春から始まる予定です。

念願だった保健学科教育部および助産学専攻科が4月から設置されました。医療人育成に向けた医学部の取り組みがさらに充実したものとなり、わが国の医療の発展に大きな貢献ができるものと期待されます。

(金山博臣)

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会
広報委員 金山博臣(委員長)、福井義浩、大下修造、太田房雄、齋藤 憲、森口博基、明渡志郎

本誌へのご意見・ご要望は、(第1総務係:木村)E-mail:isysoumu1k@jim.tokushima-u.ac.jp まで
お願いします。なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel:088-633-9118 Fax:088-633-9028

URL <http://www.hosp.med.tokushima-u.ac.jp/university/servlet/index>